

光 あ れ

[聖書]創世記 1章 1～5節

初めに、神は天地を創造された。天地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

[序] 明日に向かって生きるには

連休が始まりました。大勢の方がボランティアとして、被災地に行って働いてくださっています。素晴らしいですね。津波の被害は強烈でした。あっという間に生活が一挙に破壊されてしまいました。家族を失い、家を失い、仕事を失い、避難所暮らしです。この方々が、慰められ、励まされ、立ち直っていかれますように。

一方原発事故の方は、関係者の懸命な努力にもかかわらず思うように事態が改善されません。目に見えない放射能の汚染が風によって被害を拡げていきます。村や町がそのままの姿で在るのに、農地や家畜や仕事を捨てて避難しろとは、なかなか納得できないでしょう。これからどんな暮らしが待っているのか、困惑と不安——ニュースを見ている者でも、理不尽さに対するやり場のない怒りがこみ上げてきます。

遠く離れた福島市内で子供たちが1日1時間しか外遊びできなくなり、家の内での生活を余儀なくさせられて兄弟げんかが激しくなると、若い母親が困惑していました。果たしてこのような生活が何時まで続くのでしょうか。予測していなかったこれらの事態を、一人一人がどのように受けとめ、乗り越えていけばよいのでしょうか。

しかし大震災に襲われた被災者ばかりではありません。平常の生活を営んでいる私たちでも、人間誰しもが自分自身の内に、また家庭や職場の働きや人間関係の内に、嫌なこと、苦しいこと、また不安が生じて悩みます。それをどう処理して、明日に向かって生きていけばよいのでしょうか。

[1] 闇の中に響く声

皆さん、今日の聖書は旧新約聖書の第1頁、冒頭の言葉です。「初めに、神は天地を創造された」。「初めに」とは「物事を根本から眺め直してみれば」というような意味です。天地に起こる様々な現象、この人間社会に惹き起されている出来事、また自分というものを根本から眺め直してみれば、「全ては創造されたものである」と宣言しています。

創造されたものには、創造したお方の意図、理由が込められています。私たちが自分の存在に意味がないと思っても、生かされている以上、私を創造したお方の側には、私を生かして下さっている理由があるのです。しかしそれが闇に覆われて、私たちに分からないのです。深淵とは底なしの深

み、すなわち不安や恐れ、苦しみを象徴しています。もがけばもがくほど沈み込んでいきます。

創生記のこの天地創造の記事は、イスラエルの国がバビロンに滅ぼされ、捕囚の民として遠く敵国バビロンに連れて行かれたという惨めな境遇の中で書き綴られたと言われています。彼らはこの世界が神によって創造された時にさかのぼって、自分たちの存在を問い直してみたのです。地は混沌として何もなく、闇が深淵を覆い、人間の暮らせる状態ではありませんでした。まさにバビロンの捕囚とされている自分たちの状況でありました。

ところが混沌と闇の地に向かって神の声が響き渡りました。「光あれ」。すると光が生まれました。世界は沈黙の世界ではありませんでした。闇の中に捨てられた世界でもありませんでした。神の語りかけのある世界、神に顧みられ、語りかけられ、光がもたらされる世界なのです。言葉をもって語りかける神ですから、私たちが語りかけるならば、語り返してくださる神なのです。

私たちは先週イエス・キリストの復活を記念する礼拝を守りました。キリストが十字架につけられたのは、金曜日の朝9時でした。人々は「十字架から降りて自分を救ってみろ」「他人を救ったのに自分は救えない」と口々に罵りました。しかしイエス・キリストは無力な姿で死の苦しみにもだえ続けました。そして午後3時に「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫んで息を引き取られたのでした。

神に見捨てられる死——「どうしてこのようなひどい目にあうのか」「神も仏もあるものか!」。私たちは絶望すると、神、仏を捨ててしまいます。祈らなくなります。そして虚無の世界に陥ります。しかしイエス・キリストは死の苦しみの極みでも「わが神、わが神」と呼びかけておられました。その時もお神はキリストの神であり、共に苦しんでくださっていたのでした。そして神はキリストを墓の中から復活させて、弟子たちの信仰を復活させられました。闇はいつまでも世界を覆うものではありません。必ず光がもたらされ、見えなくなっていたものが見えてくるのです。

避難所暮らしをいっている方々がバスでお花見に招待されました。見事な桜並木です。並木道のベンチに腰を下ろし、うつむいている男性がいました。彼の家の庭にも1本の桜の木がありました。彼は幼い時から毎年その桜の花を見上げて育ててきたのです。しかし津波に家もろともに流されてしまいました。職場も失いました。満開の桜並木の下で、うつむいて沈みこんでいく彼の傍らに、困り果てた奥さんが座っていました。しかしもしも彼が聖書を読むならば、この闇の中から、彼を創造し、今日まで守り導いてこられたお方の、「光あれ」という言葉が響き渡るのが聞こえるはずです。そのお方は彼を見捨てず、変わらずに彼と共に居られるのですから。

[2] 日本人にとっての神とは

日本の一番古い歴史書は「古事記」(712年)です。江戸時代の国学者本居宣長がその注釈書「古事記伝」48巻(1798年)を著しました。これは古代文化史研究の総合的参考書とも言うべきもので、国学者の研究の最高峰と言われています。その中で本居宣長は「日本人にとって神とは、人で

あれ鳥や虫けらであれ、木や石であれ、尋常ただならぬものを言う」と述べています。

尋常ただならぬものとは格別に優れたものということです。格別に優れたものなら、人間ばかりか鳥や虫、木や石でも神さまとしてたてまつるのが、日本人の信心だと言うのです。ですから日本では神さまを八百万(ヤオヨロズ)の神々と言い、非常に数多い存在になっています。

八幡さまで親しまれている八幡神社は、源氏の武将八幡太郎義家を祀ったもので、村を守る鎮守の神として全国に建てられ、試合や戦争に勝つ祈願も捧げられました。天神さまは菅原道真を祀った神社です。彼は右大臣の地位を追われ九州大宰府に流され、無念の死を遂げました。すると京都に大きな雷が落ちて御所の一部が焼けました。道真の祟りだと恐れた人々が彼を天の神として北野天神に祀り、その霊を慰めました。彼は優れた学者でしたので、後に学問の神として各地にも祀られ、受験生が多く参拝するようになりました。お稲荷さんで親しまれている稲荷神社は、稲の霊、穀物の霊を神格化して祀っています。仕えている狐が油揚げが好物なので、いなり寿司が奉納されます。稲作農業と共に日本各地に広まりました。また古い杉の大木や大きな岩にしめ縄がはられて拜まれます。特別な精霊が宿っていると考えからです。このように尋常ただならぬ人物や生物や自然と良い関係を結ぶことで、その加護にあずかろうとする信心なのですね。

しかしこのような信心から、混沌とした闇の中に「光あれ」と語り、光をもたらす創造者の声が聞こえてくるのでしょうか。すべてのものに先立って存在し、すべてのものを、使命・役割を与えて創造された神、各自に与えられた命の貴さと使命を自覚させ、人格を養い、使命に生きるように導く神の恵みがいただけるのでしょうか。

[結] 闇と災いに宝を置く神

預言者イザヤは、「光を造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造する者、わたしが主、これらのことをするものである」(イザヤ 45:7)との神の言葉を語っています。私たちはともすると、光と平和が神の恵みであり、闇や災いは神の恵みではないと思い込んではいないでしょうか。

ところが神は私たちの言いなりなる僕ではありません。決然として闇と災いさえももたらす世界の主なのです。しかしその闇、災いもまた神が創造されたものですから「暗闇に置かれた宝、隠された富を貴方に与える」(45:3)とおっしゃっています。私たちはたとえ今、光が見えず、大きな闇、災いの中にあろうとも、それは神から捨てられたからではないのです。そこにもまた隠された宝が既に置かれているのです。神の光のもとで、神がお与え下さる恵みの道を歩んでいきたいものです。光あれ！

完